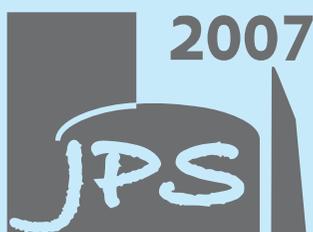


日本基礎心理学会

第26回大会プログラム

The 26th annual meeting of
the Japanese Psychonomic Society

PROGRAM



2007年12月8日土・9日日

上智大学四谷キャンパス

主催： 上智大学

ご 挨拶

日本基礎心理学会第26回大会準備委員会 委員長
道 又 爾

会員のみなさまにおかれましては、お元気でご活躍のこととお喜び申し上げます。このたび、日本基礎心理学会第26回大会を、上智大学で開催させていただくこととなりました。前回の大会との間に例年より長い時間が空き、また申し込みの締め切りが日本心理学会大会の開催と重なったこともあり、案じておりましたが、例年とほぼ同じくらいのポスター発表の申し込みをいただき、心よりお礼申し上げます。活発な基礎研究の交流の場としてご活用くださいますようお願い申し上げます。

すでにご案内の通り、ポスター発表に加えて招待講演会と2つのシンポジウムを開催いたします。今回は「基礎心理学研究」の特集号のテーマと学会の内容をゆるやかに結びつける試みを行っております。特集号のテーマをおおまかに「基礎心理学と脳機能画像研究の関わり」とし、招待講演とシンポジウムはある程度このテーマに関連のある内容となっております。これらの企画にご支援いただきました方々に心よりお礼申し上げます。

上智大学心理学専攻は文部科学省の「大学院教育改革支援プログラム」の助成を受け、「心理学研究者の統合的養成プログラム」を本年度後半より実施しております。このプログラムでは、上智大学の特徴である豊かな国際性を生かし、基礎系・臨床系といった従来の枠組みにとらわれない包括的な大学院教育を目指しております。本大会の招待講演はこのプログラムの協力を得て共催とし、一般公開とさせていただきます。プログラム関係者のご協力に心よりお礼申し上げます。

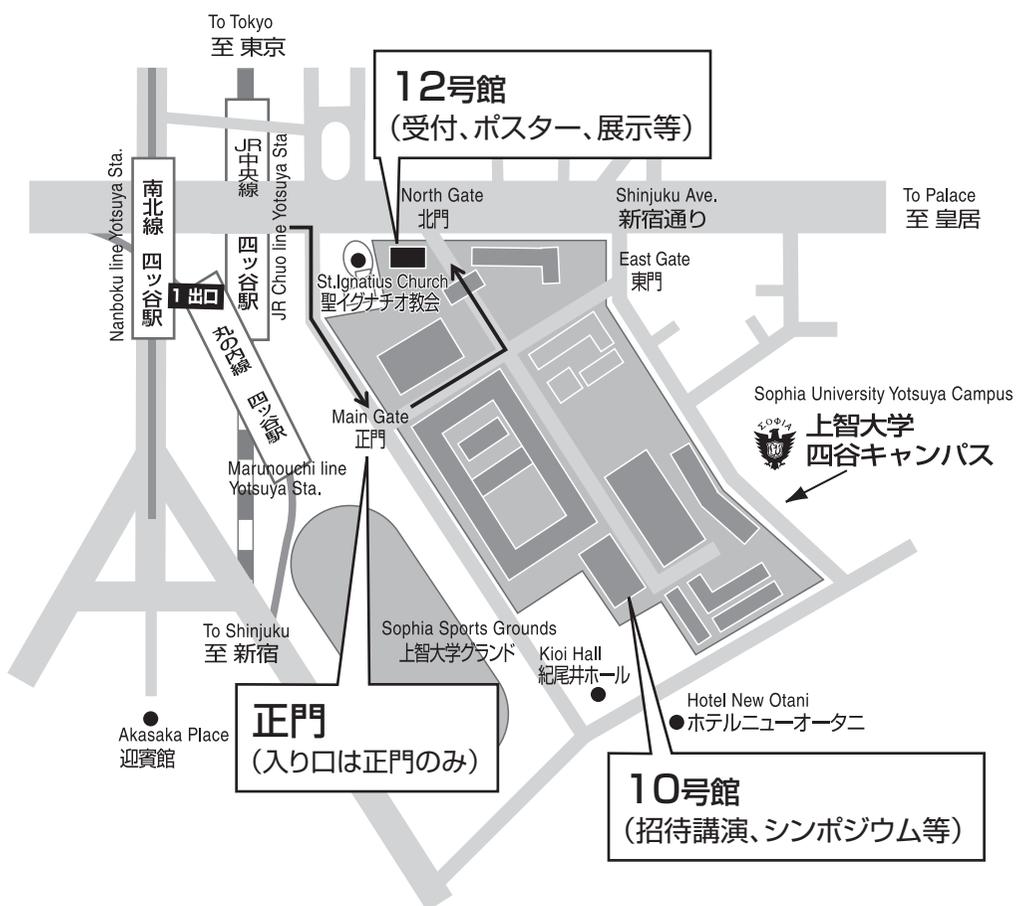
会場へのアクセス

大会会場

上智大学四谷キャンパス

東京都千代田区紀尾井町7-1

・JR中央線・総武線／東京メトロ丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 麹町口 徒歩5分

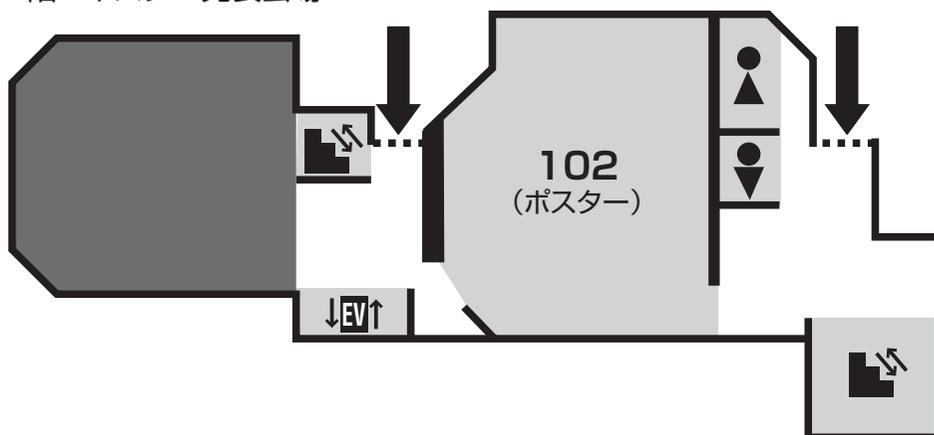


※当日は正門のみ利用可能です。

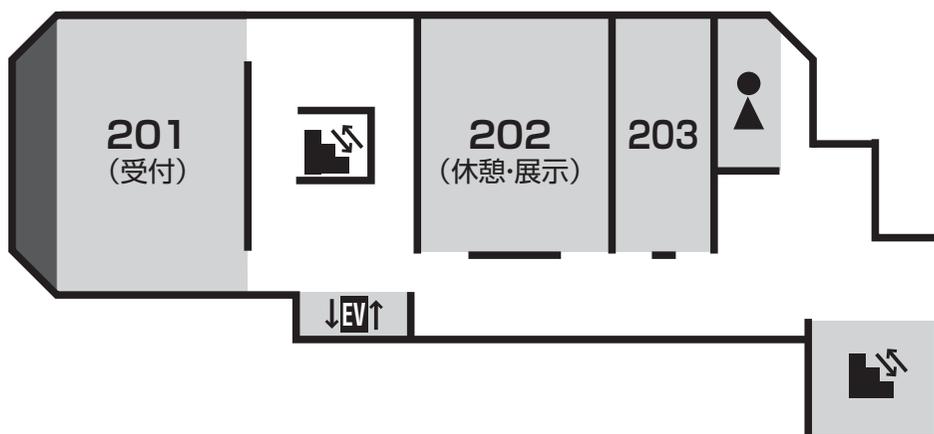
※大会会場には駐車設備がございませんので、自家用車でのご来場はご遠慮ください。

大会会場(12号館)館内図

1階：ポスター発表会場



2階：受付、休憩室、展示室



懇親会会場

東京グリーンパレス

東京都千代田区二番町2 (TEL : 03-5210-4600)

- ・大会会場から徒歩6分
- ・東京メトロ有楽町線 麹町駅 (番町出口5) 徒歩1分
- ・JR 総武線/都営地下鉄新宿線/東京メトロ南北線 市ヶ谷駅 徒歩7分
- ・JR 総武線・中央線/東京メトロ南北線・丸ノ内線 四ツ谷駅 徒歩7分
- ・東京メトロ半蔵門線 半蔵門駅 徒歩7分



※懇親会会場の詳細な地図は東京グリーンパレスホームページもご覧ください
(<http://www.tokyogp.com/access/index.html>)

大会スケジュール

開催地：上智大学四谷キャンパス

1 日目：12月8日 土					2 日目：12月9日 日			
10号館講堂	12号館102	12号館201	12号館202	3号館 5階図書資料室	10号館講堂	12号館102	12号館201	12号館202
	掲載可	受付及び、クローク (9:30～17:30)	休憩室 (9:30～17:30) 及び、展示室 (10:00～17:00)	編集委員会 理事会		掲載可	受付及び、クローク (9:30～17:30)	休憩室 (9:30～17:30) 及び、展示室 (10:00～17:00)
	ポスター発表				シンポジウム1	ポスター発表		
招待講演	ポスター掲載可					ポスター掲載可		
総会					シンポジウム2			
懇親会 東京グリーンパレス http://www.tokyogp.com								

参加者へのご案内

- 1) 大会受付およびクロークは、12号館2階の201号室にあります。
両日とも9時30分からの受付となります。
- 2) 受付は参加費を前納された方と、当日納入の方に分かれています。
 - 前納された方
受付でお名前をお申し出ください。ネームプレートをお渡しいたします。
 - 当日納入される方
受付にて「当日参加申込書」に必要事項をご記入の上、参加費をお支払いください。
参加費は6,000円(修士課程までの院生は5,000円、学部生は1,000円)です。
- 3) 懇親会は東京グリーンパレスにて開催いたします。当日参加も随時受け付けておりますので、万障お繰り合わせの上、奮ってご参加ください。当日参加の方は、受付にて参加費をお支払いください。
- 4) 休憩室および展示室は受付と同じ12号館の2階に設けております。
- 5) 喫煙は7号館前広場の一部、9号館ピロティおよび10号館喫煙所でのみ可能です。
その他の場所は禁煙となっております。
- 6) 会期中の呼び出しは原則としていたしませんのでご了承願います。受付に設置した伝言板をご利用ください。
- 7) お食事は大会会場近くの飲食店をご利用ください。受付に案内図をご用意いたします。
- 8) 宅配便の発送や資料のコピーは、大会本部では受け付けておりません。周辺のコンビニエンスストア等をご利用ください。

大会行事のご案内

- 1) 研究発表は2日間に渡り、ポスター発表の形式で行われます。ポスター発表会場は両日とも12号館102教室、発表時間は第1日目が12時から14時まで、第2日目が11時から13時までです。
- 2) 招待講演は第1日目の14時30分から16時に、10号館講堂で行われます。
- 3) シンポジウムは第2日目の13時30分から15時、および15時30分から17時に、10号館講堂で行われます。
- 4) 総会および昨年度の優秀発表賞授与式は第1日目の16時から17時に、10号館講堂で行われます。
- 5) 懇親会は第1日目の18時から20時に、東京グリーンパレスにて行われます。お誘い合わせの上、是非ご参加ください。
- 6) 機材の展示は、両日とも12号館2階202号室で行われます。

発表者へのご案内

1) 研究発表はポスター発表のみです。正式発表の要件は、指定された発表時間(2時間)にポスターを掲示し、なおかつ決められた60分の責任在席時間に質疑・討論に応じ、『基礎心理学研究』に掲載用の発表要旨(発表番号・題目・氏名・所属が明記され、本文が400字程度のものを、A4用紙に印刷すること)を提出することです。責任在席時間は、第1日目の奇数番号が12時から13時、偶数番号が13時から14時、第2日目の奇数番号が11時から12時、偶数番号が12時から13時です。

■発表者へのお願い

会誌掲載用発表要旨につきましては、多様化しつつある出版形態や閲覧手段に今後とも学会が対応していくために、提出に際して著作権を学会に譲渡していただくことをご了承ください。この件につきましてご異議がございましたら、2007年12月18日(火)までに日本基礎心理学会事務センターまでご連絡ください。期間内にご連絡がなかった場合には学会への著作権譲渡をお認めいただいたものとさせていただきます。ご理解とご協力をお願い申し上げます。

■注 意

『基礎心理学研究』に掲載用の発表要旨が大会当日の発表内容(発表題目・発表者氏名を含む)と異なることのないようご注意ください。大会当日の発表内容と異なる場合には正式発表として認められません。発表題目や発表者氏名に変更がある場合には、ポスター発表の受付にお申し出ください。

■発表要旨の提出要領

- 2007年12月4日(火)までに、日本基礎心理学会・編集担当宛に電子メールでお送りください。(kisoshin-edit@bunken.co.jp)
- 電子メールの件名(タイトル)は、「発表要旨」という文字列の後に、発表番号と代表者の氏名を続けたものにしてください。また、本文には発表題目・発表者氏名・所属を明記した後に400字程度の要旨をお書きください。
- 発表当日は、指定された発表時間の10分前までに発表要旨をA4用紙に印刷したもの(発表番号・発表題目・発表者氏名・所属を明記のこ)をポスター発表の受付に提出してください。電子メールであらかじめ発表要旨を送信できなかった方は、上記電子メールと同様の内容をテキスト形式で保存したフロッピーディスク(MS-DOS形式)を添えてください。

-
- 2) 発表者は指定された発表時間の10分前までにポスターをお貼りください。なお、ポスターは第1日目は11時00分から17時30分まで、第2日目は10時00分から17時30分まで掲示可能です。
 - 3) ポスター掲示板の大きさは幅80cm、高さ110cmです。
 - 4) ポスター掲示板の上部には、発表題目と発表者全員の氏名と所属を明記してください。連名発表の場合には、主発表者の氏名の前に○印をお付けください。
 - 5) 連名発表で主発表者が欠席の場合には、大会委員長の承認を得た場合に限り、連名発表者の1人が代行できます。ポスター発表の受付にお申し出ください。
 - 6) 資料の配付や呈示等は発表者ご自身でお願いいたします。コンピュータ等をご使用の方は、ご自身でご用意いただきますようお願いいたします。ポスター掲示板付近に電源を用意することはできませんのでご了承ください。なお、充電のための電源は休憩室に用意いたします。
 - 7) 今大会のポスター発表では、2007年度末で35歳未満の方が個人または共同研究の主発表者として行う発表が本学会の「優秀発表賞」の審査対象となります。つきましては、対象となる発表者の方には、プログラム掲載用の要旨とは別に、審査委員に配布するための要旨(審査資料用)を以下の要領であらかじめご提出いただき、審査を円滑に行いたいと存じます。この要旨の提出は発表および審査の要件ではありませんが、ご協力くださるようお願いいたします。

■ 発表要旨(審査資料用)の提出要領

- A4判用紙1枚に、発表題目・発表者氏名・所属・キーワードを含め、『日本心理学会大会発表論文集』の様式に準じて作成してください。
- 2007年11月22日(木)午後5時(必着)までに、「日本基礎心理学会事務センター」宛に、郵便またはe-mail(wordファイルまたはPDF)にてお送りください。

期限後に提出されたものは審査に利用されませんのでご注意ください。

提出先および問い合わせ先

日本基礎心理学会事務センター

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-4-19 (株)国際文献印刷社内

TEL : 03-5389-6239

e-mail : kisoshin-post@bunken.co.jp

※『基礎心理学研究』掲載用の発表要旨と審査資料用の発表要旨は提出先が異なります
のでご注意ください。

招待講演

12月8日(土)

Mechanisms of Attention: Psychophysics, Cognitive Psychology, and Cognitive Neuroscience

講演者：Zhong-Lin Lu

Laboratory of Brain ProcessES (LOBES)
Dana and David Dornsife Cognitive Neuroscience Imaging Center
& Departments of Psychology & Biomedical Engineering
University of Southern California

企画：西田 眞也 NTT コミュニケーション科学基礎研究所
道又 爾 上智大学

司会：西田 眞也 NTT コミュニケーション科学基礎研究所

講演の趣旨

The importance of attention on human performance has been recognized by sensory physiologists and psychologists for more than 100 years¹⁾. Since the 1970s²⁻⁴⁾, controlled and extensive experiments have examined the effects of selective attention to a location in space, or to an object. Under certain circumstances, attention to a location or object can improve performance accuracy or response time relative to unattended locations or unattended objects⁵⁾. In addition to behavioral studies, cognitive neuroscientists have investigated the neural bases of attention using physiology⁶⁾ and brain imaging⁷⁾

In this talk, I will review classical attention paradigms, recent advances on the theory of attention, and new insights from psychophysics and cognitive neuroscience. The review will focus on the mechanisms of attention, that is, how attention improves human performance. Situations in which the perception of objects is unchanged, but performance may differ due to different decision structures⁸⁾, will be distinguished from those in which attention changes the perceptual processes. The perceptual template model will be introduced as a

theoretical framework for analyzing mechanisms of attention⁹⁾: (1) improved filtering of external noise or distractors through retuning of perceptual templates (external noise exclusion), (2) stimulus amplification, or reduction of internal noise sources (stimulus enhancement), (3) reduction of contrast gain control (internal multiplicative noise reduction), or (4) a mixture of these three mechanisms. In behavioral studies, external noise exclusion has been shown to be a major mechanism of spatial attention, while stimulus enhancement was shown to be associated primarily with peripheral cuing of location^{10, 11)}. Finally, I will present evidence of stimulus enhancement and external noise exclusion from physiology and brain imaging.

- 1) W. James, *The Principles of Psychology*, (1890).
- 2) G. Sperling, M. J. Melchner, *Science* 202, 315 (1978).
- 3) M. I. Posner, *QJEP* 32, 3 (1980).
- 4) A. M. Treisman, G. Gelade, *Cog Psych* 12, 97 (1980).
- 5) J. Duncan, *JEP General* 113, 501 (1984).
- 6) J. Moran, R. Desimone, *Science* 229, 782 (1985).
- 7) N. Kanwisher, E. Wojciulik, *Nature Rev Neurosci* 1, 91 (2000).
- 8) M. L. Shaw, P. Shaw, *JEPHP* 4, 586 (1977).
- 9) Z.-L. Lu, B. A. Doshier, *Vis Res* 38, 1183 (1998).
- 10) Z.-L. Lu, B. A. Doshier, *JEPHP* 26, 1534 (2000).
- 11) B. A. Doshier, Z.-L. Lu, *Psych Sci* 11, 139 (2000).

シンポジウム

12月9日(日)

運動視の諸現象とメカニズム

話題提供者：物体中心運動の知覚

藤本 清 関西学院大学

能動的観察と運動視

一川 誠 千葉大学

fMRI 順応法による動き情報処理の脳内機構の研究

蘆田 宏 京都大学

指定討論者：Zhong-Lin Lu 米国南カリフォルニア大学

企画・司会：村上 郁也 東京大学

企画の趣旨

運動視は視知覚心理学のなかで最も研究の進捗している領域のひとつである。20世紀の間に様々な現象の心理物理学的基礎づけと初期運動検出過程の解明が進み、今世紀に入っては生体工学やシステム神経科学と心理学との融合が加速し、ますます多方面からの切り口で研究が発展している。本シンポジウムは、運動視知覚の心理物理学における最新の研究知見を集めてその魅力を基礎心理学の聴衆に訴え、また認知神経科学的アプローチでどれだけ統一的理解に迫れるかを議論することを目的とする。そこで、運動視分野の最先端でご活躍されている知覚心理学者に、様々な運動現象の見えにかかわる座標変換過程、アクションとの相互作用、脳内メカニズムという幅広い題材について話題提供していただき、討論によって理解を深めることとした。以下に参考のため簡単な要旨を付した。

人間の運動視知覚は網膜座標系、頭部座標系、環境座標系などいくつかの参照枠に沿って達成されていることが知られている。本講演では、物体座標系の存在および役割について、背景が運動物体の反対方向に動いて見えるバックスクロール錯視を題材

に、心理物理学および心理生理学的実験の結果に基づいて、論じる。また、関連するテーマである biological motion や implied motion についても触れたい。(藤本 清)

様々な研究が観察者の能動的運動によって生じる運動の処理と観察者の意図とは関係ない刺激の観察における運動の処理との違いを示唆している。たとえば、観察者がコンピュータマウスを使って刺激運動を能動的にコントロールしている場合、フラッシュラグ効果は有意に減少する。この講演では、能動的な観察によるフラッシュラグ効果の減少に必要な条件の解明に基づき、能動的観察による視覚における運動処理への関わりについて検討する。(一川 誠)

マカクザルの MT/MST 野は視覚的な動き情報処理の中核として知られているが、ヒトではまだ不明な点も多い。我々のグループでは、空間解像度を超えて特定 ROI 内の機能的分化を推測できる fMRI 順応法を用いて、動き情報処理の神経機構を検討してきた。ここでは、hMT+ における輝度変調運動とコントラスト変調運動の処理の独立性を示した実験 (Ashida et al., 2007, JNP) と、hMT/MST における拡大と回転運動への選択的順応を示した実験 (Wall et al., submitted) について述べ、ヒトとサルの違いの可能性についても議論する。(蘆田 宏)

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

研究発表プログラム

1日目 12月8日(土) 12:00～14:00 12号館102

在席責任時間は、奇数番号が12:00～13:00、偶数番号が13:00～14:00です。

○は主発表者、#は非会員連名発表者

1P01 視野闘争開始時における色と形の統合様式の変化
—先行刺激がもたらす見えの変調効果からの検討—

- 阿部 悟 千葉大学
- 木村 英司 千葉大学
- 御領 謙 京都女子大学

1P02 明るさ誘導における面の所属性の問題

- 新井 哲也 慶應義塾大学
- 増田 直衛 慶應義塾大学

1P03 視線知覚に対する刺激の大きさ・観察距離の効果

- 磯谷 悠子 東京大学
- 丸谷 和史 東京慈恵会医科大学, Vanderbilt University
- 中嶋 豊 東京大学
- 谿 雄祐 東京大学
- 佐藤 隆夫 東京大学

1P04 付与された課題が新奇物体の形態学習に与える影響

- 上田 祥行 京都大学
- 齋木 潤 京都大学

1P05 視覚的印付けに伴う抑制の空間的分布

- 大杉 尚之 中京大学, 産業技術総合研究所
- 河原純一郎 産業技術総合研究所
- 熊田 孝恒 産業技術総合研究所

1P06 いつ視覚的文脈手がかりは学習されるのか?

- 小川 洋和 東京大学, 日本学術振興会
- 渡邊 克巳 東京大学, JST

1P07 色弁別における間隙効果の遮蔽手掛かり依存性

- 近藤 あき 京都大学
- #山本 洋紀 京都大学
- 齋木 潤 京都大学

-
- 1P08** 物体・シーンを対象とした瞬時的カテゴリ認識の比較検討
○坂野 逸紀 京都大学
齋木 潤 京都大学
- 1P09** 刺激差と課題差が大域・局所処理に及ぼす影響
○坂本 謡子 筑波大学
- 1P10** 主観的輪郭のアラインメント精度における誘導円盤の大きさ効果
○椎名 健 文教大学
#篠原 幸喜 獨協大学
藤井 輝男 敬愛大学
- 1P11** 物体の知覚的消失に及ぼす近接・閉合の手がかりの実効範囲の検討
○柴田 理瑛 東北大学
河地 庸介 東北大学, 日本学術振興会
行場 次朗 東北大学
- 1P12** Subitizing における標的特徴情報の有効性の検討
○下村 智斉 中京大学
牧野 義隆 中京大学
森 孝行 中京大学
- 1P13** アモーダル補完に網膜位置依存性をもたらす要因
○白間 綾 お茶の水女子大学
石口 彰 お茶の水女子大学
- 1P14** 水彩効果における図と地の成立について
○高島 翠 日本大学
- 1P15** 項目の配置が視覚探索効率に与える影響
○武田 裕司 産業技術総合研究所
- 1P16** 相対的大きさに対する遠近法手がかりの役割
○戸澤 純子 川村学園女子大学
- 1P17** 垂直方向での視覚探索パフォーマンスに行為が及ぼす影響
○内藤 宏 大阪大学, 日本学術振興会
三浦 利章 大阪大学
木村 貴彦 大阪大学

研究発表要旨

1日目 12月8日(土)

1P01 視野闘争開始時における色と形の統合様式の変化 – 先行刺激がもたらす見えの変調効果からの検討 –

○阿部 悟 千葉大学大学院人文社会科学研究所
木村 英司 千葉大学文学部
御領 謙 京都女子大学発達教育学部

視野闘争の開始時の見えは先行刺激を呈示することで変調させることができ、変調の生じ方は色刺激と縞刺激では異なる。本研究では色縞刺激を用い、先行刺激の色と方位の組み合わせ、縞の輝度コントラストを操作して、先行刺激がもたらす見えの変調効果を検討した。その結果、闘争刺激の見えは刺激呈示眼に基づいて決定される場合と刺激属性に基づく場合とがあり、検査刺激の呈示時間が短いほど呈示眼の影響が強く現れた。また、輝度コントラストが大きい場合には、色と方位の組み合わせに基づいて刺激の見えが決まる傾向が見られた。以上の結果から、両眼間での色と形の統合は固定された様式で行われるのではなく、刺激条件に依存して変わることが示唆される。

1P02 明るさ誘導における面の所属性の問題

○新井 哲也 慶應義塾大学社会学研究科
増田 直衛 慶應義塾大学文学部

明るさ誘導現象においては、検査領域と誘導領域の輝度関係だけでなく、現象的所属性などの図形構造的な要因が重要視されている。特に、表面の明るさは、同一平面上に知覚される領域からの影響を受けやすいことが知られている(Gilchrist, 1977; Wolff, 1933)。先行研究では、検査領域と誘導領域の物理的な奥行き関係を操作したのに対し、本研究では、格子状の平面図形における面の奥行き関係に着目し、検査領域の所属する面の違いによって当該領域の明るさが異なるという観察を得た。この結果に対し、面の層化、現象的所属性といった知覚体制化の観点から考察する。

1P03 視線知覚に対する刺激の大きさ・観察距離の効果

○磯谷 悠子 東京大学大学院医学系研究科
丸谷 和史 東京慈恵会医科大学, Vanderbilt University
中嶋 豊 東京大学大学院人文社会系研究科
谿 雄祐 東京大学インテリジェントモデリングラボラトリー
佐藤 隆夫 東京大学大学院人文社会系研究科

対面する相手が自分を見ていると感じる相手側の視線偏角の範囲(自己範囲)に対する、刺激の大きさ、観察距離の効果を検討した。刺激は視線を水平方向に11段階偏位させた4名の顔写真。実寸以下のものはCRT/液晶モニタ上、大きいものはスクリーン上に提示した。被験者は刺激人物が自分を見ているか否か2AFCで回答し、その回答率から自己範囲を推定した。その結果、自己範囲の平均値は視線偏角にして約5度であり、大きさ、距離の効果は認められなかった。被験者は刺激の大きさや観察距離に基づいた計算を行っているわけではなく、白目と黒目の相対配置等の画像の全体的な手掛かりをもとに視線方向を判断していると考えられる。

1P04 付与された課題が新奇物体の形態学習に与える影響

○上田 祥行 京都大学人間・環境学研究所
齋木 潤 京都大学人間・環境学研究所

視覚呈示された新奇物体を学習・再認させると、その再認成績は視点依存性を示す。本研究では、新奇物体の視点依存性の変化を学習時に3種類の二重課題を付与することで検討した。まず、新奇物体の色と形態の両方を学習するように教示すると、視点依存性は形態のみを学習するように教示した条件よりも強かった。次に、構音抑制の負荷量を変化させると、視点依存性は負荷量に関わらず同程度であった。最後に、新奇物体を視覚と触覚のどちらでも再認できるように学習させると、視点依存性は消滅し、視点独立性を示した。これらから、同一感覚内での二重課題は視点依存性を強め、異種感覚間での二重課題は視点依存性を弱めることが明らかになった。

1P05 視覚的印付けに伴う抑制の空間的分布

○大杉 尚之 中京大学・産業技術総合研究所
河原純一郎 産業技術総合研究所
熊田 孝恒 産業技術総合研究所

非効率的な視覚探索が起こるはずの刺激の半数を先行提示し、半数を追加提示すると、探索は先行刺激数に依存せず効率的になる(視覚的印付け:Watson & Humphreys, 1997)。この効果は先行刺激の抑制によって生じるといわれている。本研究では、各先行刺激要素の位置のみが抑制されるのか、先行刺激の位置の周辺にも抑制が及ぶのかについて、光点検出課題を用いて検討した。光点が先行刺激周辺の空間に提示されたときの検出時間は刺激上に提示されたときとの間に差はなく、近くに刺激が存在しない空間に提示されたときに比べて長かった。この結果は、視覚的印付けの抑制は先行刺激の位置の周辺にも波及することを示している。

1P07 色弁別における間隙効果の遮蔽手掛かり依存性

○近藤 あき 京都大学大学院人間・環境学研究所
#山本 洋紀 京都大学大学院人間・環境学研究所
齋木 潤 京都大学大学院人間・環境学研究所

色の弁別は、比較する2点が隣接するよりも、少し間隙を挟んだ方が良くなる。本研究の目的は、この色弁別における間隙効果が三次元的な遮蔽関係に依存するか検討することであった。刺激は参照刺激とテスト刺激を左右に並べたもので、両者は間隙を挟む時と、輝度の異なる長方形の遮蔽物を挟む時があった。被験者は参照刺激と比較刺激のどちらがより赤いか判断し、その応答から弁別閾を測定した。結果、弁別閾値は間隙を挟む時と遮蔽物を挟む時のいずれも間隙効果を示したが、その大きさは遮蔽物を挟む時の方が高くなった。この結果は、色弁別における間隙効果は間隙が遮蔽物として知覚されるかどうかの遮蔽関係に依存することを示唆する。

1P06 いつ視覚的文脈手がかりは学習されるのか？

○小川 洋和 東京大学先端科学技術研究センター、
日本学術振興会
渡邊 克巳 東京大学先端科学技術研究センター、
JST ERATO 下條潜在脳機能プロジェクト

本研究では、視覚的文脈手がかりの潜在学習過程において、ターゲット位置と周辺のディストラクタ配列の連合が、いつどのようにして行われているかを調べた。観察者の眼球運動と連動して刺激画面を変化させることによって視覚探索中の処理過程とターゲット発見時の処理過程を分離するパラダイムを考案し、文脈手がかりの学習過程におけるそれぞれの処理過程の役割を検討した。その結果、いずれの処理過程も文脈手がかり効果を生起させるが、探索中の眼球運動に対して与える影響のタイムコースおよびその様式が異なっていることが明らかになった。これは、文脈手がかり効果に2つの異なったメカニズムが関与している可能性を示唆している。

1P08 物体・シーンを対象とした瞬時的カテゴリ認識の比較検討

○坂野 逸紀 京都大学人間・環境学研究所
齋木 潤 京都大学人間・環境学研究所

ヒトは、瞬間呈示された画像中に物体があること(検出)を判断すると同時にその物体が何かを分かること(同定)が知られている。本研究では、シーン認識においても検出と同定が同時に行われているのかを検討した。実験協力者は、瞬間呈示された画像が自然画像か否かを判断する検出課題、および自然画像があるカテゴリであるかを判断するカテゴリ同定課題を行った。その結果、シーン画像に対しては、検出課題の成績に比べて同定課題の成績が有意に低かった。一方、物体画像に対しては、検出課題と同定課題の成績間にシーン画像ほどの乖離はみられなかった。つまり、シーンの同定は物体と異なり、検出よりも処理時間を要することが示された。

日本基礎心理学会第26回大会準備委員会

上智大学総合人間科学部心理学科

委員長：道又 爾

末神 翔

小林 梨沙

大野 真史

長田今日子

菊池 健

山岡 香央

連絡先

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7番1号

上智大学総合人間科学部心理学科内

TEL：03-3238-3877（末神）／03-3238-3659（道又）

FAX：03-3238-3877

e-mail：t-suegam@sophia.ac.jp（末神）／c-michim@sophia.ac.jp（道又）

ホームページ：http://pweb.sophia.ac.jp/~c-michim/kisoshin.html

後 援

上智大学

招待講演共催

平成19年度大学院教育改革支援プログラム

「心理学研究者の統合的養成プログラム」

日本基礎心理学会第26回大会準備委員会

協賛団体御芳名

本大会を開催するにあたり、下記企業より多大なご支援を賜りました。
ここに御芳名を記して、感謝の意を表します。(敬称略)

展 示

ナモト貿易株式会社

日本事務光機株式会社

広 告

株式会社モンテシステム

株式会社トーヨーフィジカル

アイ・ビー・エス・ジャパン株式会社

株式会社数理システム

株式会社朝倉書店

株式会社医学書院

株式会社サン・エデュケーショナル

株式会社ナカニシヤ出版

日本事務光機株式会社

株式会社風間書房

株式会社西村書店

(広告掲載順)

日本基礎心理学会第26回大会

会 期：平成19年12月8日(土)・9日(日)

委員長：道又 爾

事務局：〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7番1号
上智大学総合人間科学部心理学科内
TEL：03-3238-3877(末神)／03-3238-3659(道又)
FAX：03-3238-3877

印 刷：Next COMPANY **Secand** 株式会社セカンド
〒862-0950 熊本市水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F
TEL096-382-7793 FAX096-386-2025